

話のある風景』(八四)というエッセイ集、夭折した詩人矢沢宰の生涯を描いた『若いいのちの旅』(八六)という伝記も著している。「あめふりくまのこ」で第六回日本童謡賞、赤い鳥文学賞特別賞受賞。

(西條和子)

テ

デ・アミーチス

エドモンド Edinondo De Amicis

一八四六—一九〇八 イタリアの作家、児童文学作家。

ピエモンテ地方のオネーリアに生まれた。幼いころから父に愛国心や、貧しい者・弱い者への愛について教えられる。一四歳の時、愛国詩人ジュゼッペ・ジュヌティの詩に感動して、イタリア独立運動に加わろうとして果たせず、その後モデーナの陸軍士官学校に入学した。一八六五年に歩兵少尉に任官し、第三独立戦争に小隊長として各地を転戦した後、シチリアでコレラにかかるとフィレンツェに戻ってからは、雑誌「イタリア陸軍」の編集に当たった。そしてその誌上に連載した『Bozetti di vita militare 軍隊物語』をもつて作

家生活に入った。その後の彼の作家生活は、およそ次の三つの時期に分けられる。第一期は七二年から七年に至る時期である。この時期に、彼はイタリアの各地をはじめ、地中海沿岸の各国や、オランダ、イギリスなどを精力的に歩きまわり、「Spagna スペイン」(一八七一)、「Olanda オランダ」(七四)、「Constantinopoli コンスタンチノープル」(七九)などの旅行記を出版した。第二期は七九年から八九年に至るほぼ一〇年で、代表作『クオーレ』(八六)はこの時期に書かれた。『クオーレ』は、我が国では、杉谷代水〔教科書〕 童日誌 (一九〇二)など、明治期から翻訳・再話があり、その後『愛の学校』という名で親しまれた時期も長かった。この時期にはもう一つの重要な作品『Sull' Oceano 海上にて』(一八八九)もある。この作品は貧しいイタリア移民に取材したものである。九〇年にはじまる第三期は、社会主義への鋭い傾きと、数多い教育的な著作によつて代表される。九一年の社会党入党、その後に続く母の死と、息子フーリオの不慮の死など、波乱の多い晩年でもあった。この時期の著作には『Il romanzo di un maestro ある先生の物語』(九〇)、『Tra casa e scuola 家庭と学校の間』(九一)、『Ricordi d'infanzia e di scuola 少年時代と学校の思いで』(一九〇一)などがある。歿したのはボルディゲーラであつた。

〔クオーレ〕 Cuore 長編童話。一八八六年。デ・アミー

チスが『クオーレ』の創作を思ひたつたのは七八年のことだったが、それが完成して世に出たのは八六年一〇月一五日であった。『クオーレ』は小学生エンリーコが見聞きしたことを記録した日記の部分、家族の手紙、月々の先生の話の三つの部分から成り立っている。『母をたずねて』の名で我が国によく知られている話は、月々の先生の話の中の一つである。

(安藤美紀夫)

(滑川道夫)

ディトマス Thomas Day 一七四八～八九 イギリスの作家。パリで出会ったルソーの影響を受け、『エニール』を手本とした理想の子ども像を追求した。

『The History of Sandford and Merton, a Work Intended for the Use of Children サンドフォードとマートン物語』(一七八三、八六、八九)は、金持ちの商人の息子で甘やかされ育つたトニー・マートンと、農民の子で肉体労働を尊ぶハリー・サンドフォードの、

悪い子と良い子の対比をエピソードでつづった物語で、一〇〇年以上読み継がれるロングセラーとなつた。ほかに、『The History of Little Jack』(ヤック物語) (八八)や、社会改革を論じたパンフレット、詩などがある。

(三宅興子)

ティーキンソン ピーター Peter Dickinson 一九一七～ イギリスの児童文学作家。アフリカのサンビアンに生まれ、イートン校とケンブリッジ大学で学ぶ。「パンチ」誌の編集に加わり、四〇歳代前半から本格的な執筆生活に入る。近代文明を破壊することに熱中する「大変動」の時代を設定し、その時代の終末を『過去にもどされた国』(一九六八)などの三部作で描く。中国の北清事変の時代を背景にした作品『トゥルク』(七九)でカーネギー賞受賞。

(中野節子)

ティーエク ヨハン ルートヴィヒ Johann Ludwig Tieck 一七七三～一八五三 ドイツロマン派の代表的作家。ベルリン生まれ。ハレ、ゲッティンゲン、エルランゲンの各大学で学ぶ。中世民話に取材した『金髪のエクベルト』(一七九六)、『美しいマグローネの不思議な愛の物語』(九六)などの童話を数々発表。ペロー童話取材の戯曲『長靴をはいた牡猫』(九七)は、ロマン的

家庭教育に役立つお伽噺の意味であった。「めでたしめでたし」で終わる教訓的お伽噺は、一八九五年から日

露戦争時代にかけて盛りあがつた。同名書の下田歌子『庭訓お伽噺』(一九〇八)は、『お伽草紙』の『唐絲草紙』、『猫の忠義』、『狐の恨み』などを少女向きに再話したもので『少女文庫』の第二編。第一編は『お伽噺教草』でいすれも教訓啓蒙書の代表的な著作として当時好評を博した。

ディケンズ Charles Dickens 一八一

改作する彼との間で論争が行われたこともある。

(谷本誠剛)

二七〇 イギリスのヴィクトリア朝の代表的な作家。直接子どものために書かれたものに、『A child's History of England 子どものためのイギリス史』(一八五一～五二)、『A Holiday Romance ホリデイ・ロマンス』(六八)などがあるが、しかしディケンズはむしろその作品の多くがある意味で児童文学化しているといえるだろう。『ディヴィッド・カッパー・フィルド』、『オリヴァー・トウェイスト』など少年を主人公にするものがことにそうで、早くからダイジェスト版が出ている。

『Christmas Books クリスマスの本』(四三～四八)に入っている『クリスマス・キャロル』などはいまむしろ児童文学と考えられているのである。ディケンズは少年時に家が没落して靴墨工場で働かされたことがあり、その時の心の傷がのちの創作のバネともなったが、このことが虐げられた子どもや貧しい者に寄せる強い共感の心となつた。また物語性が豊かで人物が白と黒にくっきりと分かれる筋立ても子どもの心をよく捕らえるものであつた。なお、『オリヴァー・トウェイスト』については、「真の子どもを描いた最初のもの」(イザベル・ジャン)との評がある。アンデルセンとの親交もあつたディケンズは、またフェアリー・テールのよき理解者でもあつた。彼の挿絵を多く書いたクルックシャンクとはこのことでは対立し、おとぎ話を平氣で

帝国教育会出版部

ていこくじゅいくかい

全国的組織をも

*帝国教育会(前身、大日本教育会。一八八三創立)の出版部が独立し活況に向かつたのは大橋貞雄が部長に就任した一九三二年以降である。『小学作法』六冊(一九三五)を帝国教育会の組織を活用し企業基礎を固め、教育書、児童書の出版に乗り出す。学習書・夏休帳の大量出版のほか戦時期には雑誌「コドモノヒカリ」(三七創刊、四四「日本ノコドモ」と改題)を刊行、與田準一、関英雄らの編集部参加によつて『新日本幼年文庫』『帝教絵本』シリーズ、『新銳児童文学叢書』など新機軸を打ち出した。戦後はチャイルド本社と改称して発行を続けていく。

(滑川道夫)

ディズニー ウォルト Walt Walter Elias Disney 一九〇一～六六 アメリカを代表するアニメーション映画制作者、実業家。シカゴの小さな建築業者の四男に生まれ、信仰心の厚い両親に育てられた。その後一家はミズーリ州の農場に移り、そこで成長した。少年時代から漫画を描くことが好きで、エンターテイナーとしての才能をもつていた。一九二〇年代から漫画映画の制作を志して会社を創立、昔話の動画化や动画と人間を組み合わせた『アリスコメディー』シリーズをつくる。一七年純粹の漫画映画『しあわせうさぎ

のオズワルド』シリーズで認められ、二八年はじめてのトーキー漫画『蒸氣船ウイリー』に主人公としてミッキーマウスを登場させ、音楽と効果と動作が同時性をもつた『シリーシンフォニー』シリーズを次々に制作、ミッキーマウスは二九年ごろにはキャラクターとして大流行、三一年組織したミッキーマウス・クラブには一〇〇万人の会員が集まつた。三二年映画芸術科学アカデミーは特別賞を贈り、ディズニーの名は全世界に広まつた。三三年登場人物にさらに人間らしい個性をもたせた作品『三匹の子ブタ』は大恐慌のさなか主題歌とともに映画史上空前の大ヒットとなる。三四年気の短いドナルドダックを『かしこいメンドリ』に登場させる。三七年には上映時間八三分、原画二〇〇万枚にのぼりマルティプレーン・カメラを使用した長編漫画映画『白雪姫』を完成、アカデミー賞を獲得。四〇年に第二作『ピノキオ』と野心的な音楽映画『ファンタジア』、四一年『ダンボ』、四三年動物物語の『バンビ』で長編漫画の路線を確立。第一次世界大戦中は『空軍力の勝利』などを制作して愛国者ディズニーの一一面を示す。戦後は四六年リーマスおじさんの物語を『南部の唄』に、五〇年『シンデレラ』、また『宝島』で劇映画にも進出、五一年『不思議の国のアリス』、五三年『ピーターパン』と長編記録映画シリーズの第一作『砂漠は生きている』、五四年『海底二万マイル』、五五年『わ

んわん物語』、五八年『眠れる森の美女』、六一年『一〇一匹わんちゃん大行進』、そして六四年にはミュージカル映画『メリーポピンズ』でも成功を収めた。この間五四年にテレビ番組『ディズニーランド物語』シリーズを手がけ家庭娛樂番組に大きな影響を与えた。五五年には長年の夢であり、立体化された動画といわれる巨大な遊園地ディズニーランドをロサンゼルス郊外に建設企業家としても名を成した。ディズニーの生涯はまさにアメリカ的成功物語の典型である。エンターテインメントに対し貫した主張をもち人を樂しませることにまれにみる才能を示し、ショービジネス界に大きな足跡を残した。昔話や児童文学作品を自らのイメージで独特的ふくらませ方をした反面、ディズニー一流の映像化は原作のもつ芸術的な質を損なつたという激しい批判も受けた。

（松居直）

デイヤング マインダート Meindert De Jong 一九〇六年 児童文学作家。オランダ生まれだが、八歳でアメリカに移住した。大学卒業後、農業に従事しつつ、飼っていた動物たちを描くことから作家生活に入る。作品は大半がオランダかアメリカの田舎を舞台としており、代表作には幼い子どもと動物のつながりを描いた『ぼくの黒うさぎシャデラク』（一九五三）、『丘はうたう』（六二）、子どもたちが村にコウノトリをこさせようと苦心する『コウノトリと六人の子どもたち』（五四）

などがある。なお、以上を含む七冊はセンドラックの挿絵によつても高く評価されている。ディヤングの語り口は、不安や喜びに大きく揺れる幼い子どもの心そのままのようでありながら、当の子どもは十分に意識していない周囲の様子や大人たちの心理までをも、くつきりと浮かびあがらせるという精緻なもので、しかも子どもが珍しいことばに抱く興味などを通してことばというもの美しさを伝えることにも心が配られている。

(脇 明子)

ティラー ハードレッド デロイス Mildred Delois Taylor (一九四八?) アメリカの児童文学作家。作者自身の体験に基づき、白人たちの搾取から土地と木々を守つた『Songs of Trees 木の歌』(一九七五)を皮切りに、『じんぐ雷よ、私の叫びをきけ』(七六)、『Let the Circle Be Unbroken 輪を守れ』(八一)などの黒人一家の物語を書き続ける。とくに第二作は、人種偏見を黒人側から強烈に告発したニューベリー賞を受賞した作品。ハミルトンとともに黒人文学の双壁を成す。

(原 昌)

テキスト・クリティック text critique 本文批評。

作品の本文を校訂し、確定する作業のこと。作品の發表に際してその本文の決定はおおむね作者によつて行われるが、歴後發表される作品では本文の決定は当然のところながら第三者によつてなされ、本文確定を軽々

しく行うことができない。また、活字による刊行本では、流布される間に写本ほど大きな異同は生じないにしても、それでも単純なミスや社会的要請によつて改稿されて異同が生じることがあり、底本の決定に慎重を要し、本文の確定作業が必要となる。単純なミスは別として、児童文学の場合、読者が子どもであるために特有の異同が起きる。すなわち、仮名や漢字の用字、段落の異同、児童の理解を容易にするための用語の変更、また挿絵との関係による本文の異同、あるいは最近少なくなつたが、ページ数の関係による本文削除などがある。そのほかの社会的要請による異同には、戦時中の作品がその後に発表される際の作者や第三者による改筆があげられよう。また浜田廣介のよう、いつたん発表した作品を再掲載する時、そのつど改稿する作家もあり、それを本文とするかに一定の態度を要することがある。児童文学にテキスト・クリティックの必要が問題となつたのは、教科書掲載作品の改ざんが一九六〇年ごろ問題となつたこと、またそのころ宮沢賢治や新美南吉の全集が編まれ本文確定が問題となつたことがあげられる。

(向川幹雄)

手塚治虫 (おさむ 一九二六-) (大15-) 漫画家、アニメーション作家。本名治。大阪府豊中市生まれ。子どもの時からの昆虫好きが、虫を加えてペントネームにした。大阪大学医学部卒業、医学博士。小学生で漫

画を描きはじめ、戦時下学徒動員の軍需工場でも漫画を描く。デビュー作は『マアちゃんの日記帳』(一九四六「毎日小学生新聞」)で、最初の単行本は酒井七馬作による『新宝島』(四七)でこれは四〇万部も売れる。雑誌長期連載最初の作品『ジャングル大帝』(五〇「^{*}漫画少年」)までに描き下ろした漫画単行本は『キングコング』(四七)から『漫画大学』(五〇)までざつと二〇冊になる。最初の少女漫画は『リボンの騎士』(五三「少女クラブ」)で、これはストーリーもの少女漫画そのもののはじまりともなった。戦前の児童漫画を受け継ぎつつ、戦後入ってきたアメリカ連続漫画とディズニー漫画映画、それに映画の手法を漫画に取り入れての手塚漫画は、「動いて音がする」まったく新しい漫画を生み出した。『鉄腕アトム』(五一「少年」)は、その後のSF漫画の道を拓き、さらに一九六三年の国産テレビ漫画『鉄腕アトム』の原作にもなる。松谷みよ子の『龍の子太郎』に刺激されて民話的世界を漫画に描いた『ハトよ天まで』(六四「サンケイ新聞」)や歴史と人間の生命を捉えた『火の鳥』シリーズ(六七「COM」)など、過去、現在、未来をそれぞれ深く厳しくそして温かく捉えた。また戦争悪を憎む作品も多く、自伝的戦争体験『紙の砦』(七四「少年キング」)などのほかに大人漫画の最初である『第三帝国の崩壊』(五五「漫画読本」)の系列は、『アドルフに告ぐ』(八四「週刊文春」)へと発展する。一方ア

ニメーション映画の製作にもかかわって、実験アニメ『ある街角の物語』などの成功を土台に六三年にはテレビアニメーションへと乗り出していき、この分野でも開拓者の役割を果たした。漫画作品には『0マン』(五九)、『きりひと讃歌』(七〇)、『ブッダ』(七二)、『ブラック・ジャック』(七三)、『ユニコ』(七六)など、絵本に『おかあさんのむかしむかし』(八四)などがあり、『手塚治虫漫画全集』全三〇〇巻が八四年に完結している。手塚治虫に影響されて漫画家になつた人たち、藤子不二雄、赤塚不二夫、石森章太郎、松本零士、ちばてつや、永島慎一、竹宮恵子、萩尾望都と数えあげればきりがない。戦後の子ども漫画界には手塚山脈がそびえている。それによつて子どもたちは児童文化財としての漫画に出会うことになったのである。

【参考文献】『手塚治虫漫画四〇年』(一九八四 秋田書店)

(石子 順)

テツツナ一 リーザ Lisa Tetzner 一八九四—一九六三 ドイツの口演童話家、児童ラジオキヤスター、話し方教育講師、児童文学者、童話収集・翻訳者。一歳から病気のため身障者になる。社会主義女学校に通つた後、話し方の訓練を受け、一四歳からオイゲン・ディートリヒの青少年運動に参加し、童話を口演して中・南ドイツの村々を巡回する。その間に、のちに『Die rote Zora 赤毛のゾラ』などの作品で名声を博したク

テニエル

ルト・ヘルト(本名クルト・クレーバー)と知り合い結婚

どの挿絵も手がけた。

原昌

（一九二四）から夫の恩師で社会問題を手がけた女性作家として、児童・少年のための作品を書きはじめる。一九二七年からベルリンのラジオで児童番組のキャスターを務める。ナチスの圧迫で夫に統いてスイスへ亡命する（三三）。同地で政治・社会問題を扱った『二少年の秘密』（三五）を書く。戦時中は何もできず困窮する。四五年以後はじめて講演やラジオドラマと小説の執筆ができるようになる。一二年にもわたるファシズムとの戦いの体験に基づく自伝的小説『六七番地の子どもたち』（九巻（三三）～四九）は各国の虐げられた子どもたちが戦時中スイスに集まって結束する物語である。テツ・ツナーにはまた世界各国の童話を集めた編著『Die schönsten Märchen der Welt』（世界のとても美しい童話）（一巻（一六）～（七））もある。

テニエル ジョン Sir John Tenniel

八二〇三一

フランスのジャーナリスト、作家。新聞連載小説の開祖。バルザックとともに文芸家協会を設立する。少年を主人公とする『Les Aventures de Jean-Paul Choppert ジャン＝ポール・シモペールの冒險』(一八三二)は、騒々しいアンチ・ヒーローの引き起しす息もつかせぬ冒險譚によりたちまち読者の人気を得、版を重ねた。コミックな味わいをもつ第一作『Les Aventures de Robert-Robert ロベール＝ロベールの冒險』(一八四〇)はエーメに至るユーモア文学の系譜の先駆けとなつた。

(新倉朗子)

九一四 イギリスの挿絵画家。『パンチ』誌に挿絵を描いていたが、ルイス・キャロルを紹介され、彼の厳しい注文に激論を重ねつつ、『ふしぎの国のアリス』の挿絵を完成。続いて『鏡の国のアリス』の依頼にもこたえる。サッカレーやR・ドイルらの絵の影響もみられるが、線画を基調として『アリス』のナンセンスの世界をみごとに捉え、その後の『アリス』の挿絵家たちをしのいだ。『アラビアン・ナイト』(一八六三—六五)など

出開美千子

みで
ちは
こり

デフォード ダニエル Daniel Defoe 一六六〇—一七

活の端々を実際に細かく描いていることの効果も忘れてはいけない。それはことにものをつくり出す場で迫真のものとなるが、それは実にリアリティーに富んだ、最終的には人間の勝利の物語だったのである。確かにクルーソーの生き方には、人間の原始的本能をかきたてるものがあるといえよう。こうして児童文学化した作品が、イギリス近代小説の先駆けであったことも意義深い。

(谷本誠剛)

三一 イギリス一八世紀のジャーナリストで小説家。肉屋の息子に生まれたデフォードは、非国教徒の学校を出た後、実業界に入つて浮沈を重ねたり、当時の政争にもかかわって多数のパンフレットを書いたりするが、やがて晩年に至つて物語づくりの才を生かして『ロビンソン・クルーソー』(一七一九)を書く。セルカーケという当時実在のモデルをもとに、二八年間を孤島で暮らす男を描いた作品は当時大変なベストセラーとなり、同時にそれは子ども部屋にも入り込んで、「子どもが大人の手から奪う」(アザール)という形で児童文学化した。作品はその後の無数の「クルーソーもの」の元祖となつたのである。無人島への漂流というテーマ、そしてその地での数々の危難を切り抜けて生活を拡大していくという物語は、当然子どもの中にある自立願望と冒險心をかきたてるものであつたが、同時にノンフィクションを装うデフォードが、クルーソーの生

で、主題ともいう。素材と深くかかわるもので、作家の内的な要求から素材を捉え、それを解釈し、理念にまで表現したもの。作品を構成するストーリーやドラマはこのテーマによって統一される。いかなる作品にもテーマはあるが、それを強く打ち出すものと、イメージや感覚によつて象徴的に示すものがある。童話の場合、テーマを強調しすぎると作者の思想が目立ちすぎ、物語的興味を失うこともある。

(西本鶏介)

デュボア ウィリアム・P William Pène du Bois 一九一六— アメリカのイラストレーター、児童文学作家。両親が芸術家で、子ども時代から絵画を好み、青年時代より児童文学、絵本の創作を志す。長編の代表作には『三人のおまわりさん』(一九三八)、『二十一の気球』(四七 ニューベリー賞受賞)、『巨人ぼうやの物語』(五四)、絵本には『Lion ライオン』(五五)がある。

作品は、科学的空想にあふれ、ユーモアと機知に富んでいる。

(渡辺茂男)

デュボアサン ロジャー Roger Duvovisn 一九〇四
 一八〇 スイス生まれのアメリカの絵本作家。『White Snow, Bright Snow しろいゆき、ひかるゆき』(一九四七)で一九四八年度コールドコット賞を受賞。『子ども持つ生き生きとした好奇心』を充足させられる絵本づくりを信条としており、動物を主人公にしたシリーズを数多く発表している。中でも夫人のルイーズ・ファティオが物語を担当した『「きげんならいおん』シリーズはユーモアにあふれた絵本として評判が高い。

(金平聖之助)

デュマ アレクサンドル Alexandre Dumas Père

一八〇一～七〇 フランスの小説家、劇作家。息子は、『椿姫』の作者である。父子同名のため、両者を区別するために『父デュマ』、『息子デュマ』と呼ぶ。(日本では、大、小をつけて呼ぶ)。父はナポレオン軍の將軍であつたがナポレオンの不興を買ひ軍籍を離れパリ北東のヴィレール・コトレで不遇の生活を送つた。デュマの四歳の時、父が死去したために学校教育を受けることなく自然の中で成長。二〇歳のころ劇作家を志してパリに出てオルレアン公(のちの国王、ルイ・フィリップ)の事務所に書記として就職。ロマン派の詩人、ユゴー、ネルヴァールらと交遊を結ぶ。一八二九年、『Henri III

et sa cour アンリ三世とその宮廷』がフランス座で上演され大成功を収めた。以後、劇、歴史小説、旅行記、回想録など、五七編の作品を世に送つた。中でも、歴史小説、『三銃士』(一八四四)、その続編『二十年後』(四五)、『ブランジュロンヌ子爵』(四八)、『モンテクリスト伯』(四五)は、波乱万丈の筋立てと主人公の正義感と意志力、固い友情などで多くの読者の心を捕らえ今日も広く読まれている。とくに、冒頭の作品は、我が国でも子ども向けに再話され主人公タルタニヤンは人気がある。児童文学作品には、ホフマンの同名の作品に想を得た『Histoire d'un Casse-noisette くるみ割り人形』『Antony アントニー』『Comtes du Père Grigogine ジャーニュ父さん的话』の三作がある。

(塚原亮一)

デュマ フィリップ Philippe Dumas 一九四〇～

フランスのイラストレーター、絵本作家。ユーモラスな中に、風刺のきいた作品が多い。『ろばくん一代記』(一九七六)、『まつくるローラ』シリーズ(七六)、『」とりのオデット』(七八)など、繊細なテッサンと物語性で推薦図書に選ばれている。とくに人間の生と死について、やわしく語りながら、深く考えさせる『Ce changement-là この変りよう』(八一)は、絶賛され、数々の賞を受けて、児童文学界の話題作となつた。(末松水海子)

デュラック エドマンド Edmund Dulac 一八八二～一九五三 イギリスの挿絵画家。フランスのトウ

トゥーリーズで織物商人の子に生まれ、トゥーリーズ大学で法律を学ぶ。のちトゥーリーズ美術専門学校、パリのアカデミー・ジュリアンで絵画を学び、親英家となつてイギリスに渡り一九一二年に帰化。英米の雑誌に風刺漫画や著名人の肖像画を寄稿。毎年ロンドンで個展を開く。ほかに芝居の舞台装置や衣装のデザイン、英仏の記念切手、紙幣、家具調度のデザインもしたが、主たる仕事は文学作品、とくに児童向けの豪華本の挿絵だった。渡英直後に手がけたプロンテ姉妹の作品集をはじめ、『アラビアン・ナイト』(一九〇七)、シェークスピアの『嵐』(一〇八)、『眠れる森の美女』(一〇)、『アン・デルセン作品集』(一一)、ステイーヴンソンの『宝島』(二七)などラッカムと並んで世紀はじめの豪華美本流行期を代表し、ペルシアやインドや日本の絵画の様式を積極的に取り入れて読者を大いに酔わせた。

(吉田新二)

寺内万治郎 一八九〇—一九六四(明23—昭39) 洋画家。大阪市に生まれ東京美術学校洋画科卒業。一九二五、二七年帝展特選、三三年帝展審査員となり、また四三年から五〇年まで東京美術学校講師として後進の指導に当たる。五一年日本芸術院賞受賞。六〇年日本芸術院会員。高い格調と正確な描写力による裸婦は定評があった。児童文化における仕事としては、二〇年代に主として「金の星」に表紙絵・口絵・

挿絵を描き、当時の有力な童画家の一人に数えられる。

(渡辺圭二)

寺村輝夫 一九二八—(昭3-) 童話作家。東京市に生まれる。九人兄弟の六男。東京府立第一商業学校入学後、海軍甲種飛行予科練習生として海軍航空隊に入隊し特攻隊を志願するが、敗戦後、早稲田大学専門部政治経済科入学、早大童話会に入会(一九四六)。在学中より同会顧問の坪田譲治の紹介で竹崎有斐、大石真とともに小峰書店で児童書の編集に従事。その後、三十書房からあかね書房に移り、同社非常勤取締役となる。編集活動のかたわら、福音館書店の松居直の勧めで『幼児のための童話集』に『ぞうのたまごのたまごやき』(五六)を書き、これが「母の友」に転載され、さらに創刊間もない「こどものとも」で絵本化される。『王さま』という子ども類似のユニーキで個性的なキャラクターを主人公にした、日本の新しいナンセンス童話の誕生となる。これらを収めた『ぼくは王さま』を今江祥智の推挙により理論社から一九六一年に処女出版、毎日出版文化賞を受賞(六二)。以後、子どもたちの圧倒的な支持を得て、王さまシリーズを中心にして『おむくんとむくん』(六五)、『こびとのピコ』(六八)、『まほうつかいのチヨモチヨモ』(六九)などの幼年童話、『ぼくのいえなんだ』(七〇)、『おにのあかべえ』(七三)、『あいうえおうさま』(七九 絵本につばん賞)な

どの絵本、『日本むかし話』全三巻(七九・八〇)などの再話、アフリカの文化と思想に刺激され、度重なるアフリカ取材をもとにした『生きている猛獸』(七一)、『サファリと魔法の国』(七四)などのノンフィクション、シユバイツァー神話に疑問を投げかけた画期的な偉人伝『アフリカのシユバイツァー』(七八)などのほか、『わたしの童話創作ノート』(八一)と各分野に精力的に活躍。自宅の一室を「王さま文庫」として近隣の子どもに開放、童話雑誌「のん」を発行して後進の指導に当たり、文京女子短大教授を務めるなど活動は多岐にわたる。八二年に『寺村輝夫童話全集』全一〇巻を刊行。八四年、「獨得のナンセンステールズで日本の児童文学の枠をひろげた功績により」巖谷小波文芸賞を受賞。「ぼくは王さま」^{〔おうさま〕} 童話集。一九六一年六月理論社刊。『ぞうのたま』の『たま』や『のほが』、『しゃばんだまのくびかわ』『ウソとホントの宝石ばこ』『サーカスにはいつた王さま』を収める。その後、これを第一集とする「ぼくは王さま」シリーズが『王さまばんざい』『王さまロボット』『王さまびっくり』『王さまめいたんて』『王さまたんけんたい』『王さまレストラン』『王さまパトロール』『まほうつかいのチヨモチヨモ』『王さまかいぞくせん』と一〇集まで続く。これらをまとめた『ぼくは王さま 全一冊』(八五)もある。

(野上 晓)

デ・ラ・メア ウォルター Walter De La Mare 一八七三～一九五六 イギリスの詩人、作家。子どもや孤獨な人々の目から見た世界の不思議さを捉えた、幻想的で繊細な作風で知られる。子どものための作品には、探求の旅を描いたファンタジーの古典である『ムルガーニのはるかな旅』(一九一〇)や、昔話的な語り口の短編を集めた『魔女の箒』(一九一五)などがある。詩集『Peacock Pie 孔雀のパイ』(一九一三)は、英米で広く愛唱されている。

デレッダ グラーツィア Grazia Deledda 一八七一～一九三六 イタリアの作家。一九一六年にノーベル賞を受賞した。サルジニア島の生まれで、処女作『Fior di Sardegna サルデーニャの花』(一八九二)の後、生まれた島の風土に根ざした、リアリスティックな作品を書き続けた。代表作には『Cenere 灰』(一九〇四)、『La via del male 悪の道』(一九〇六)などがある。一方、児童文学にも関心をもち、ヴァンバに誘われて、「日曜新聞」に『I tre vecchi 三人のおじごわん』『Il pastorello 小さな羊飼い』などの短編を載せている。(安藤美紀夫)

テレビ文化 ^{〔テレビ〕} テレビ ジャーナリズム用語。国から電波使用的の免許を取ったテレビ局が大がかりな設備を使ってのみ放送できるために、映画などのように自由に子どものためのすばらしい作品を作れない。いつも送り手にとつては一方的となるのがテレビ文化の特質であ

る。日本でのテレビ放送開始は一九五三年(昭28)で、一〇年後のテレビアニメ放映開始が子どもをテレビのところにする。しかもCMによる宣伝効果がきて、テレビ文化そのものはたえずスポンサーの商品宣伝という側面をもつ。スポンサーの意志が番組を決めるために、子ども番組の内容はアニメーションと特撮ドラマを中心となっている。児童文学、絵本を素材にしたものの、あるいはオリジナルの子どもドラマが皆無に近い。チェック機関がない。子どもをテレビの味方にする運動などが七〇年代に起つたが、今は子どものテレビを見る会が活動している。

(石子 順)

伝記でんき ノンフィクションの一分野で、歴史上に実在して一定の社会的貢献をした人物の個人的生涯

を書いた作品をいう。アーバスナットはニコルソンの説をひいて、伝記は、歴史上の事実をつらねて個人を浮き彫りにした文学であることが必要条件であり、児童向きには物語化された伝記が最も良い型だといつてい

る。モーロアは「伝記作者の選択の第一は題材だ」といい、リリアン・スミスは「おとなが偉人とよぶ人びとの生涯の中には、子どもにとって冒険味がなく、面白みがない場合が沢山ある」から、「子どもたちが聞くたくなるような物語を持つた人物」を取りあげるべきだと指摘している。物語をもつた人物の生涯をリアルに描いた伝記は、読者である児童にその人物への強い

愛着と敬意を抱かせ、人生あるいは人間への興味を強める。S・ノース『エジソン』、イートン『ガンジー伝』、E・ドーリー『キュリー夫人』などは国際的に読まれている。我が国では最初の児童書シリーズ『少年文学叢書』にも伝記は多く、『少年読本』『世界歴史譚』は内外の歴史上の人物を扱った本格的な伝記シリーズで、未熟な作品が少なくないが、注目すべき力作もある。大正・昭和を通じて英雄や武将・軍人の伝記が盛んに刊行された中で、吉野源三郎のリンカーン伝は異色作であった。戦後は秋元寿恵夫『人間・野口英世』や岩崎卓爾を描いた谷真介『台風の島に生きる』、ひのまどかのチャイコフスキーナなどの音楽家シリーズが評価されている。

天狗てんぐ 中国では古来、音を発して流れ、地上に落ちて火災をもたらす天狗という妖星の存在が信じられてきた。また山に住む怪獣にも同名のものも考えられてきた。日本にその伝承が伝えられ、山中他界にいる赭顔高鼻で飛行自在の人間に似た異類が、山岳宗教に取り込まれ、天狗信仰となつた。伝説・昔話の登場人物としても活躍し、中世の能などにも出てくる。修験道の行者に似たいでたちで、羽うちわをもち、高足駄を履いたイメージが最も普及している。(益田勝実)

伝説でんせつ 村や村の自然、特異な人物、でき事などについての口伝え。ものや習俗の由来を説明すること

も多い。同じく口伝えである昔話とは、かなり明瞭な違いがある。伝説は、奇跡的なこと、超自然的なものやこととの出会いそのものを、主たる話題にする。そして、出会いに際しての人間の驚愕を伝えようとする。出会った人間は、それによつて衝撃を受け、病を得て、生命を失うことさえある。昔話では、そうした出会いは、主人公の幸福に至る一過程にすぎなかつたり、人間が知恵などによつて克服すべき対象とされる。伝説には、古く神話にまでさかのぼりうる話材を扱うものと、生活の近くにある自然やでき事を扱う場合とがある。後者の場合、多くは、自然の形や場所、現象の由来説明になる。それは、村の歴史そのものを伝えようと/orするものと考えることができる。したがつて、人間に信じてもらいたいと欲しているのである。信じるかどうかは、時代により、個人によつて変動がある。ドイツのグリム兄弟は、有名な『グリム童話集』以外に、『ドイツ伝説集』を編み、公刊した。しかし『童話集』ほど人々に知られないでいる。日本では、一九四九年に、柳田国男が『日本伝説名彙』を公刊した。そこで分類は、石、木など何についての伝説かという観点から行われている。

【参考文献】柳田国男『伝説』（一九四〇 岩波書店）、J・P・バイヤール『伝説の歴史』（田辺定之助訳、一九五八 白水社）

（小澤俊夫）

テンネボルク ハインリヒ マリーア Heinrich Maria Denneborg 一九〇九～ 西ドイツの人形芝居家、児童文学作家。『ルンベルシュテイルツヒエン』（一九三三）など、主に昔話をもとにした人形芝居の脚本を多く書き、自ら演じて世界の各地を回つた。一方、『ヤンと野生の馬』（五七）、『ロバの子グリゼラ』（五五）のよう、子どもと動物の心の交流を温かい筆致で書いた秀作も多い。ラジオやテレビでも活躍している。

（上田真而子）

ト

土井 晚翠 （どい　ばんすい） 一八七一～一九五二（明治四～昭和二七）

英文学者、詩人。戸籍上は「つちい」と読むが、世間の慣用を認め、「どい」とも称するようになった。本名林吉、仙台市に生まれる。一八九七年東京帝国大学卒後、東京の郁文館中学に奉職。一九〇〇年仙台に帰郷、母校の第二高等学校教授となる。学生時代から詩作に入る。一八九九年出版の処女詩集『天地有情』のほか、